幼年教育研究年報　第38巻　5－13
The Annual Research on Early Childhood, 2016

倉橋惣三の幼稚園教育における「生活」概念の検討
― 教育方法と保育内容の視点から ―

小　山　優　子[1]

A Study on Kurahashi Souzou's thought of Life in Kindergarten Education from a point of view of Educational Methods and Contents of Child Care and Education

Yuko KOYAMA[1]

Abstract: This study aims to analyze Kurahashi Souzou's thought of life in kindergarten education from a point of view of educational methods and contents of child care and education. As for results: (1) He criticizes educational methods of elementary school and doctrinal Froebelian that teacher leads children strongly and it uses a uniform timetable. The educational methods in kindergarten are appropriate children's play out of doors and their natural living, and real life withdraws children's motivation and will. (2) Life in kindergarten includes contents of child care and education of five forms of play, song, observation, speech, handicrafts, and so on, and it is formed children's voluntary and teacher's inducement.

Key words: Life, Kindergarten Education, Educational Methods, Contents of Child Care and Education

1．はじめに

「日本の幼児教育の父」と呼ばれる倉橋惣三は，明治の終わりから東京女子高等師範学校で児童心理学を教え始め，のちに附属幼稚園主事として幼稚園の実践に関わりながら幼児教育理論を構築した人物である。倉橋の誘導保育法にみられる「生活を生活で生活へ」という言葉に象徴されるように，倉橋は生活という用語を保育理論の重要な鍵としていたように思われるが，倉橋の多用する「生活」という語がどのような意味を持つものかについては倉橋研究の中で特に明確にされていない。

倉橋研究の動向について，諏訪義英は研究の特徴別に分類している[1)]が，それらは倉橋の理論・思想の形成を歴史的に検討した思想史研究と，倉橋の誘導保育論や保育案に関する教育方法的研究に分けられる。倉橋の思想史研究で「生活」概念との関連で論じたものは，宍戸や諏訪に代表される，倉橋のもつ家族主義的傾向を指摘する研究が挙げられる。宍戸健夫[2)]は，倉橋の個性尊重・児童中心主義のもとに子どもの自発的生活の内容や相互中心生活を尊重する幼児教育理論は，自然と合一するところに主体の確立を求めようとする日本的思想，日本的自然観にあるとし，諏訪義英[3)]は，倉橋の近代個人主義的人権思想に根ざした児童観と自然的人格的感化に根ざした教育観が生活教育論として展開し，子ども同士の相互的教育は個人主義に基づく子ども個人発達の手段と捉える。これらの研究は倉橋のいう「子どもの相互的生活」自体に主眼はなく，倉橋の理論・思想史を問うことに目的があり，倉橋の思想が宍戸の家族国家観の下における保育イデオロギーになってしまった点や，諏訪の倉橋の家族主義的傾向が家庭生活や家庭教育の大切さを強調したために生じたことを明らかにするものであった。

一方，「生活」との関連から誘導保育法や保育案を論じた倉橋の教育方法的研究では，誘導保育論の現代的意義を高く評価した津守真[4)]や

1　島根県立大学短期大学部

坂元彦太郎[5] らがいるが，一方で複数の研究者が倉橋の誘導保育論における理論・内容論・方法論の不十分さを指摘している。岡本和子は，子どもの相互的生活と誘導保育法の重要性を倉橋が提唱したのは画期的な業績とし，一人一人の子どもの生活に即する教育は一斉保育や画一保育にならないという保育形態上の意義を述べるが，幼児の生活興味・相互的生活の中身，すなわち子どもに何を教えようとするのか，子どもが何を学ぶのかといった視点がぬけていること[6]，誘導保育法は自発性を本領とする遊び指導に普遍性をもつが，客観世界の伝達や，子どもの事実認識や知識の獲得と興味や意欲などの心の発達との関係，幼児期に自然や人に親しむ心の涵養の人生における位置づけの問題などは明らかにされていない[7]とする。諏訪きぬ[8]は，倉橋は幼児の生活の総体を保育内容・方法として「系統化」しようとしたことや文化遺産を伝える媒体としての保育者のあり方に教育の主眼を置いたが，保育案の内容よりも形式的方法の意義を強調することにより，「活動や行為を通して幼児に育てられるべき客観的知識や技術（技能）を明らかにしようとする側面は希薄化され，（中略）幼児と保育者との生活を通して働きかけるべき保育内容の選択基準を明示することを避けてしまった」とする。野沢正子[9] は，倉橋の誘導概念に見られる保育内容と方法は，文化から抽出した教材体系となる教育内容とそれを学習者に結びつける教育方法の明確な概念化が成立しえないものであり，「保育内容に文化伝達の契機が意識的にとらえられず，『自己充実』もそれがたち向うべき対象認識をもたない自己活動理論であって，内容・方法の明確な概念化が成立しえないものとなっている」と批判した。これらの批判は，倉橋の教育内容論・教育方法論が誘導保育理論の中で欠落しているという見解であるが，倉橋研究の中で幼稚園における教育内容･教育方法を特徴づける「生活」概念を倉橋はどのような意味で用いていたのかを問うことなく，保育内容が欠落していると結論づけているようにみえる。倉橋の生活概念については，小川博久が「倉橋は『生活』とは何かについて明確な定義をしていないし，それをしようとする気もないように思われる。むしろ，『生活』が含んでいる様々な多義的要素をそのままの形で『生活』概念がひっくくっているように思われる」[10] と述べているように，倉橋の生活概念は多様な意味を含む言葉として使用されている。本稿では，倉橋の生活概念の始まりから誘導保育論の完成の時期に述べられている生活に関する言及を取り上げ，倉橋の「生活」に込めた意図や意味を明らかにすることを本研究の目的とする。倉橋の幼児教育理論に着目し，倉橋の「生活」概念の生成過程を歴史的な変遷から考察し，幼児教育における倉橋の生活概念の意味を教育方法と保育内容の視点から捉え直すことを本研究の目的とする。

２．倉橋の「生活」概念の始まり

１）倉橋の保育理論の原型

倉橋の保育理論は，幼稚園保母への講演を重ねる中で少しずつ形成されていったものである[11] が，その最初となるのが明治45（1912）年に京阪神三市連合保育会において講演した「幼児保育の新目標」である[12]。ここで倉橋は，現代は文明が発達したために「幼児の体，及び精神上に非常なる迫害を加えている」状況にあり，幼児教育の目標は「幼児の神経系統の教育」であるとする。つまり多数の子供を室内に置くことや「机の保育」によって生じる弊害があること，今日の社会においては強い実行力を必要とする時代になり，「努力の生活，すなわち実行の生活が非常に必要なる時代になってきた」こと，戸外保育，野外保育，自然的保育により「野外に出しまして酸素の供給を充分にして自由に自然物をもって遊ばせ，そうして末端の神経の作用を後にして，足，腰，肩というような大きな筋肉の使用をまずもってさせることが幼児教育の新目標に合ったこと」とする。ここで倉橋は，「努力の生活」「実行の生活」という言葉を使いながら子どもにどのような力を育成すべきかという幼児の教育上の目標を「生活」という語を用いて語っている。

続いて大正２（1913）年，倉橋は「教えない教育」と題し，幼児教育の方法論を述べる[13]。ここでは，教育を「教える教育」「間接に教える教育」「教えない教育」の３種類に分け，小学校以上の学校教育などの課業としての教える教育，遊戯を利用した間接に教える教育，教える側も子どもの側も教育をする・受けていると自覚しない教えない教育があるとする。また教えない教育は「習慣を利用する教育」で，子どもが身につけるべき３つの習慣，１つは早起きやあいさつ，行儀などの「動作の上の習慣」，２つは学問や勉強などの「考えの上の習慣」，３つは道徳を身につけるなどの「感じ（感情）

の上の習慣」であり，これらの３つの習慣を子どもの周囲にある「社会」や気候や自然などの「天然」，物的周囲や人的周囲などの「家庭」を通して子どもが身につけることが望ましく,「教えない教育は子供に適当な周囲を与えるという問題に帰する」とする。

倉橋のこれらの論調には，幼稚園において子どもを室内に閉じ込め机の上で恩物などを行なうフレーベル主義の形式的保育に対する批判や，戸外や野外における自然保育の重要性，学校教育での課業のような教える教育とは異なり，幼児期の子どもにとって「遊び」といった間接的に教える教育や習慣を通して身につける教えない教育に意味があること，社会，自然，家庭，人的・物的環境などの子どもの周囲を整える中で子どもの力を育成することが重要である「環境による教育」の重要性など，倉橋の保育理論の原型がここに見える。しかしこの時点までは，一般的な幼児教育論と教育方法論を述べるにとどまるのだが，続く「保育入門」の連載から，倉橋は「生活」を基本とする本格的な保育理論を展開する。

２）「生活」概念の登場

大正３（1914）年，倉橋は『婦人と子ども』誌上で「保育入門」と題し計13回の連載を始めるが，これ以降，倉橋は生活という語を幼児の教育上，重要な概念として使い始める。保育入門では，倉橋は幼稚園教育の役割や教育方法，設備や遊具などを論じているが，その第１回目では「幼児の生活」との書き出しで，「子供の生活は発達であって，発達は将来を期待するものである」とし，視覚，聴覚，嗅覚，触覚などの外的刺激を感じる「幼児の感覚生活」を活発にすること，幼児の知識や精神内容を「幼児の内的生活」「抽象の概念生活」において発達させると述べ[14]，幼児の知識や感覚を発達させるための「幼児の生活」を通して育成するものとする。また幼児が遊び仲間を欲することから，幼児の「共同生活」の要求を認めること，幼児同士の対人感情から「道徳生活」が始まるとし，幼児の発達を促すために幼稚園生活があるとして「生活」という語を多用する。

この幼稚園教育の方法については，「（幼稚園は）小学校この他の教育におけるがごとく，与うべき教科教材が国家的社会的に規定せられてあって，いかにしてこれを教授せんかとする研究とは，全然趣を異にするものである。換言すれば幼児をしていかに充分にかつ正当に生活せしめんかという問題に他ならぬ。（中略）幼児の生活を真に自発的ならしめ,相互的ならしめ,具体的ならしめ，習慣的ならしむるもの，遊戯にごとくものはない，幼稚園教育法の基本は実に遊戯であらざるを得ないのである」「遊戯が児童の自発生活であることは多くいうまでもない」[15]とし，幼児にとって遊びが教育方法上ふさわしく，遊びを通じて自発的な力を育てることが望ましいとして幼児教育と学校教育の教育方法の違いを述べる。また実体遊具の種類について，「自然界及び人事界の万象一切にわたるので，それに相応する一切の生活が遊戯せらるるのである。すなわち，実体遊具は，それぞれの生活を誘発するものである。（中略）飲食の器物を模したものは,いわゆるままごととして,実際の対客饗応の生活を誘導するのである。電車，船，自動車，皆それぞれの交通機関に対する生活を誘導するのである。しかして，幼児は成人の実生活を傍観して，活発なる好奇心を心の中に促されている。それが，これ等の遊具によって，実現せらるるところに満足と興味とが起こるのである」[16]と述べる。また実物教育を自然的・社会的なものの２つに分け，小鳥や草花などの自然物に親しみ交わる自然的実物教育と，学校教室，商店，工場などの社会生活の実状を知る社会的実物教育が，教育的・内容的に幼児に適当な性質のものであり，「実物がこの独特なる力をもって，幼児の心を活かし，働かし，及び感受させてくれればよい」「実際生活が与うる現実世界の主動的被動的生活は，教育価値の最大なるものでなければならない」[17]とする。さらに，幼児が遊戯，音楽，図画，手技，談話などの保育項目を行なうことの意味についても説明しており[18]，幼稚園における保育項目の重要性も語っている。

この保育入門で倉橋は，幼児の「生活」とは大人が生活する現実世界・実際生活，実物や自然物，社会生活などの周囲の環境が子どもの心を動かし，やりたいという気持ちを引き出すとし，友達関係の形成や心身の発達の促進などの幼児の教育目標をリアルな「生活」から引き出していくものとしている。

３）「生活」の教育方法・保育内容的視点の萌芽

大正４（1915）年の京阪神連合保育会における講演で，倉橋は「幼児教育の特色」と題し，幼稚園教育の４つの特徴を述べている[19]。第一は幼児の自発的生活を尊重すること，第二は幼児の自発的生活の内容を尊重し，充実発揮させ

るためには幼児に充分な相互的生活をさせること，第三には幼児の生活をなるべく渾然として分割しないものにすること，第四は幼児教育が概念的，観念的ではなくむしろ情緒主義であることである。このうちの第一の幼児の自発的生活を尊重するとは２つの意味があり，一つは「なるべく幼児を自発状態に置いて，それに向って吾々の与えんとするところをうまく仕向けていく」とする教育方法的側面であり，二つは「自発的生活を教育の手段の上に用いるのみでなく幼児の自発的生活そのものが内容的に，非常に大切なものである」とする生活が教育内容そのものになっているという保育内容的側面である。つまり倉橋は，ここで「生活」という語に教育方法のみならず，保育内容をも含む包括的な意味を付与していることがうかがえる。

大正７（1918）年に倉橋は「幼稚園とはいかなるところか」と題し，幼児を幼稚園に託す家庭に向けて幼稚園の特色を語っている[20]。そこでは，幼稚園は小学校とはその趣きを異にしていること，昔の幼稚園は学校の課業にように考え幼稚園教育の本質とは異なることをしていたが，今日の幼稚園は子どもの自然を基にして行ってゆき，子どもが歌いたい，絵にして表したい，形にして作りたいという強い欲求をもっているのを，最も子どもに適した材料と方法とで満足させるものだとする。そして「子供は年齢相応に実際の生活に興味を持っているものであります。のでこれを満足させるために草花の世話もさせます。鳥や家畜の飼育にも手伝わせます。相当な用事もさせます，しかしこれもそれらの仕事に熟練させようとか，また用事をさせて幼稚園の手助けをさせようとかいうのではありません。（中略）子供の自然に求むるところのものであり，また満足させて子供自身のために利益あることであるというところからに外ありません」「幼稚園の一日はその間に適当の休息も与えて子供の心をゆるめたり引き締めたりして行きながら子供に十分の活動の満足を与えていくのであります」とし，課業とは異なる幼稚園の一日の流れを作り出す「生活」という用語で説明する。

大正８（1919）年，倉橋は「生活か教育か」と題し，第２回全国幼稚園関係者大会で講演を行なっている[21]。ここで倉橋は，人間生活が進むにつれ生活から教育を分離することになったが，「学校組織で，教育を行う専門家が，教育を行うという特別の場所で，生活から教育を分離することになった」とする。

３．倉橋の「生活」を通した保育理論の進化

１）「生活」を基盤とする保育理論の形成

倉橋は欧米帰国後，『婦人と子ども』誌上で展開してきた著作を『幼稚園雑草』として大正15（1926）年に出版する[22]。これは「保育入門」以降に幼稚園教育について保育の目的・方法・内容の点から幼稚園保母や母親に語ってきたことや，欧米外遊時に見た外国の保育施設についての内容が掲載されているものであり，前述の「幼稚園はいかなるところか」「幼児教育の特色」など倉橋の保育理論の代表的なものが含まれているものである。

倉橋が３度目の東京女子高等師範学校附属幼稚園主事に就任した翌年の昭和６（1931）年，倉橋は「就学前の教育」を発表する。これは世界の就学前教育を体系的にまとめたものとなっており，ルソー，オーエン，フレーベル，モンテッソーリの保育思想や施設の紹介，アメリカの新教育運動やイギリスのナーセリー・スクールの紹介，日本の幼稚園令などの幼稚園教育の現状について紹介した上で，わが国の就学前教育の目的と特性を述べている。倉橋は日本の就学前教育の目的を「人間の基本教育」「基礎教育」とし，幼児期は人生始めの第一段階として重要であり，そこから出発，発生する内的意義を持つものとし，小学校教育における実質的知能の教育やイギリスの読み書き算を教えたインファント・スクールのようなものではなく，「（幼児教育の基本は）知能の早き獲得にあらずして，生命の発展勢力の増進と統制にある。無限の元気であり，多面の興味であり，不断の試行力であり，しかして，年齢に相応せる適度の自己統制とである。皆これ，知能の成果ではなくして，生活活力そのものである。生活活力は根の教育である。すなわち，就学前教育は自己発展力の教育である」[23]とする。その上で，就学前教育の教育目的は基本教育，身体の強靭，性情の教育を目指し，教育方法は生活本位，遊戯の尊重，社会的，環境的，機会の補足，欲求の充足，生活による誘発，心もちという８つの特色を持つものとする。このうち，「生活本位」では，就学前教育は「精神能力の部分を仕立て上げるのが目的ではなく，生活活力としての全体的発達を目的としている。したがって，その方法としても，まずその生活そのものを本位とするので

なければならぬ。生活そのものを本位するということは，生活としての実質を離れないこと，生活としての自然を失わせないことを意味する」「生活を生活で教育することに他ならず，教育方法でありながら，多分に生活的であることである」とし[24]，生活本位という言葉を用いながら，教育方法かつ保育内容としての「生活」概念を示していく。また「生活による誘発」では，幼児の自発性を損なわないためには環境による誘導が必要であるが，人による「教育者自身の生活による誘導」もあり，「生活の内容と同じ内容への誘発＝感化」と「生活のもつ動き，力，換言すれば強く生活されているということが，幼児に及ぼすところの誘発的効果こそ，就学前教育法としての重要なるものである。楽しく踊ることで躍らせ，熱心に製作することで製作させ，幼児をその生活の方へ引き入れてくるのである」「生活による生活の教育としては，教育者の生活がまず行われて，それが幼児に波動していく」[25]とし，周囲の環境により子どもの自発性を誘導していくのみでなく，保育者の人的環境，保育者自身が行動し生活していくことで子どもを誘導していくことの重要性を説き，子どもを誘導する方法を示す言葉として「生活」という語を使う。

さらに倉橋はここにおいて，生活概念と保育項目との関係について，「幼稚園令に保育項目が定めてあることは往々にして，小学校の教科目と同一視せられ，それらの項目を習得せしむることを目的とせるかの誤解を生ずることがある。しかも，これらの諸項目は，幼児の生活活力の自然の発展形態を挙げたるものに過ぎないので，生活活力の旺盛なる幼児は，おのずから遊戯し，唱歌し，観察し，語りまた想像し，及び製作せんとして，恐らくは寸時も静止空居しない。すなわち，これらのものは，幼児の生活活力の自然のあれ方であり，その十分なる機会を与えらるることは，生活活力の養分なることを認めたものに他ならぬ」[26]とし，保育項目が保育者の側が決めて子どもに与えるものではなく，子どもの側から保育項目を選択したくなるよう「生活」の中に取り込むものとして保育項目を説明した。

2）「生活」を基盤とする保育理論の完成

倉橋は昭和８年夏に日本幼稚園協会保育講習会で講演し，その内容を昭和９（1934）年『幼稚園保育法真諦』として出版している。これは倉橋の今まで幼稚園教育の方法を端的にまとめたものであるが，ここでも「幼稚園が，幼児の生活の場として，その生活の形態が，幼児に適していなければなりません」[27]として，幼稚園を生活の場として位置づける。「幼児たちを呼び寄せるのではなく，幼児が自分たちで集って遊んでいるところへ出かけて行かれると考えてみましょう。あの椎の木の陰に子供が集って遊んでいる。あの芝生に子供が集って遊んでいる。そこへ，あなたの方から出かけていく。あるいは子供の家の子供部屋へ立ち寄り，日当たりよい縁側へ腰をかけさせてもらい，という風に，子供の生活しているところへ教育を持って出かけていくとしましょう。そうしたら，随所に子供の真の生活形態のままで，教育をなさることができるわけです」[28]と説く。合わせて倉橋は，「もっともっと幼児の自然の生活形態のままで保育がしてみたい」として「幼稚園臭さ」を否定し，「私はいつもよく，生活を生活で生活へ，という何だか呪文のようなことを言っています。が，この生活を生活で生活へという言葉には，その間に教育ということを寄せ付けないように聞こえますが，もちろん目的の方からいえば，どこまでも教育でありますけれども，ただその教育としてもっている目的を，対象にはその生活のままをさせておいて，そこへもちかけていきたい心を呪文にして唱えているに外ならないのです」[29]とする。この「生活を生活で生活へ」を実践するためには，幼稚園生活は朝の集会から始めるのではなく，自由遊びから始めるのが自然とし，「朝来てからお帰りまで，ずっと流れつづけているのが幼児の幼稚園の一日です」[30]とする。この生活を柱とした教育方法について倉橋は，教育の生活化や生活主義教育という言葉には，教育を基としてそれをどう生活的にしていくかという調子があるが「われわれの考えでは，少なくとも幼児教育の場合においては，教育の生活化ではなくて，むしろ生活の教育化といいたいのです。否，教育化という言葉も，すでにあくどすぎるのでありまして，化してしまってはもう生活の本味がなくなります。教育という言葉さえ避けたいほどに，生活を主体として，その中へ教育を織り込むといいますが，はさむといいますか，そういうところまでいきたいのであります」[31]と，幼児と保育者により形成される幼稚園の生活の中にそっと教育的要素が入り込む形がふさわしいとする。

さらに倉橋は，生活と保育項目の関係についても踏み込み，自由遊び，談話，唱歌，観察な

どの保育項目を小学校の時間割のように行なっていく保育項目の羅列を否定し，保育者の誘導による誘導保育案を提唱する。「まず保育項目があって，保育案を作るのではなく，まず誘導保育案を立てて，それから各々の保育内容事項が考えられるのです。（中略）まず生活の主題が先にあって，その中に各々の保育内容がはいってくるのでなくてはならないのであります。保育はまず幼児の生活に基づくものであるとすれば，どうしてもこうでなければなりません。保育項目はそれ自身が教材ではなくて誘導される内容です」[32] とする。つまり，幼児が経験することが望まれる保育項目は，幼稚園の生活の中で保育者の側が物的・人的に環境を用意する中で誘導し，自然と身につける内容と位置づける。

昭和９（1934）年，倉橋は日本幼稚園協会の夏の講習会で「保育項目の実際」と題し講演する[33]。ここでは，保育項目は決して，一品一品のごちそうではないとし，幼稚園においては，遊戯，唱歌，談話，観察，手技等の一品料理を食べさせるのではなく，幼稚園としての全体の食卓，食べ物に対して食事という全体的なものがあり，「生活」とも呼べる全体的な食事の中に一つ一つの活動がどう入っていくことが大事であるかを述べる。

昭和10（1935）年，倉橋は『系統保育案の実際』を出版し，東京女子師範学校附属幼稚園の保母の実践から系統保育案について論じている[34]。ここにおいて，系統的な保育案を作成する際には，「自由遊戯」と「生活訓練」を含む「生活」と，「誘導保育案」と「課程保育案」を含む「保育設定案」とに分け，「生活のままを，生活のままで指導誘導せんとする意味であって，方法的に何ら設定保育的性質を帯びない」生活と，「方法的設定の性質を持つ」「保育者の方から持ち出し，少なくとも持ちかけてゆく方法的提案」である保育設定案に分け，幼稚園の保育内容が偏らないように，系統的に行われるようにするための案として示している。さらに翌年の昭和11（1936）年，倉橋は日本幼稚園協会の夏の講習会において「保育案」と題し，講演をしている。ここでは，誘導保育案と課程保育案との関係性を「非常に理想的な場合を言いましたならば，課程保育案が誘導保育案の中にずうっと溶け込んでいながら，しかも各保育項目がきちんきちんと徹底的に各期待効果を遂げ得るように指導され，それがまた更にその誘導保育が子どもの生活の方にずっと入り込んで自由遊びと一緒になってきたならば，それこそ実に天国幼稚園，理想幼稚園とはこういうのを言うのであります」[35] とし，幼児の自然な生活の中に保育項目が誘導されたり，課程保育案として意図的に幼稚園の一日に含む中で，保育内容の偏りがないように，保育項目が徹底され，教育効果が上がることを理想として論じている。

４．倉橋の「生活」概念の意味

１）倉橋の「生活」概念の形成過程

倉橋は「保育入門」から生活という語を用い始めるが，倉橋が24年という長い年月をかけ保育理論を練り上げる中で，幼児教育の教育目標，教育方法，教育内容を明確にし，それらを関連づけていった。倉橋は幼稚園教育を通じて幼児が身につけるべき目標を達成するために，幼児にふさわしい教育方法と保育内容を示したが，その両者を統合する概念として「生活」を位置づけた。この生活概念は，倉橋が著書『フレーベル』の中で，「生活を尊重するフレーベルの教育が，生活を子どもに与え，われわれの方から，子どもの生活に参してゆくに止まらず，子どもをして実生活の中にあらしめることの意義を認むるに至って，真に生活すなわち教育の教育実体観を全うするものといえる。『われわれは子どもと共に生活し，また子どもをしてわれわれと共に生活せしめねばならぬ』とは，フレーベル教育中の最達見の一つである」[36] と紹介しているように，フレーベルから保育理論を学んだ倉橋がフレーベルの思想をそのまま受けつぎ，倉橋の保育理論の中で展開したものであると考えられる。生活概念の出発点はフレーベルであったが，倉橋は幼稚園保母への毎年の講演を通じて，生活理論を教育方法や教育内容の点から成熟させ，幼稚園令に示された保育項目を保育理論の中にどう位置づけるかを実際の保育案として構想する中で，「生活」の中に遊びや保育項目を含み，幼児の自発性や主体性を尊重する幼児の教育方法と保育内容を統合した幼稚園生活の姿を理論化したといえる。

２）倉橋の「生活」概念の教育方法的分析

倉橋の生活概念にみられる教育方法上の特色は次の３点が挙げられる。第一に倉橋は，幼稚園におけるフレーベルの恩物主義による机の保育や形式的保育や保育者主導の保育項目を授業のように時間配当する教育方法，また小学校以上の学校教育における課業・教える教育を否定した。

その理由は，一つには教師・保育者主導の学習や活動は子どもの自発性に基づく学びにはならず，幼児期の教育にそぐわないとするからであり，二つには活動時間を45分などに細切れに配列するのは，子どもが活動に取り組む時間の個人差を無視することになり，子どもの活動の充実のためには子どもや活動に合わせて取り組む時間を変更することが幼児期の教育方法に合っているという考えによるものである。第二には，幼児期の教育は戸外・野外・自然保育や遊びを通して子どもの発達を促すことが望ましいとし，幼児は登園後に自由遊びから一日の幼稚園生活を始め,「朝来てからお帰りまで，ずっと流れ続ける幼稚園の一日」が幼児にとって適切とするのである。幼稚園という生活の中に子どもの遊びが組み込まれ，保育項目にある様々な活動が子どもの主体性を尊重しながら組み込まれていく教育方法が幼児期にふさわしいと考えたのである。第三に倉橋は，社会，自然，家庭，幼稚園での物的周囲や人的周囲から子どもの自発性を引き出すことを目指し，人的環境としての保育者自身が生活者として生活する中で子どもを誘導するという「環境による教育」の教育方法を提案した。その環境は「幼児は成人の実生活を傍観して，活発なる好奇心を心の中に促される」とし，子どもを誘導する生活は子どもの周囲の自然物や大人の社会生活，社会的実物生活であり，大人の現実社会にある本物の生活のイメージであった。それゆえ，幼稚園においても草花の世話や家畜の飼育なども子どもが手伝い，幼児同士がお互い影響し合いながら生活する中で，子どもの発達を助長する幼児期の教育方法上の特徴を生活という語で説明したといえる。このように,倉橋は生活という語を，子どもの発達や自発性，個人差，幼児期の特性に合わせた保育を行うことを象徴する教育方法上の用語として使用したのである。

3）倉橋の「生活」概念の保育内容的分析

倉橋の生活概念にみられる保育内容上の特色は次の２点が挙げられる。第一に倉橋は「生活そのものを本位とする」とし,「生活としての実質を離れないこと，生活としての自然を失わせないこと」「生活を生活で教育することに他ならず，教育方法でありながら，多分に生活的である」とする。つまり，生活の実質感や自然観を害わないようにしながら，幼児たちが自然と群れて遊んでいる姿や子どもたちが集って生活している状況を幼稚園の真の姿と捉え，幼児期にふさわしい生活による教育方法と，遊びや自然な流れで行われる保育内容全体が「生活」となり，生活の中に保育内容・保育項目を入れ込み一くくりにする概念として使用する。ここでは，生活感がありつつも，家庭生活とは異なる幼稚園特有の生活があり，その生活の中に遊びや保育項目などが自然な形で内包され，流れる一日の中に遊びや保育項目が含まれて成立する生活そのものが保育内容であり，子どもが学ぶべき教育内容になると倉橋は考える。

第二に倉橋は,「保育項目はそれ自体が教材ではなくて誘導される内容」とし，生活の中に保育項目を潜り込ませ，遊びや設定活動において子どもの自発性のもとに保育項目に取り組み身につけるものとして「生活」を位置づけた。倉橋は保育項目を学校教育の時間割のように羅列し，幼児の主体性や興味・関心を無視して保育者主導で一方的に行う保育を教育方法の点から批判したが，保育項目自体は必要ないものとはみなさず，幼児の生活や遊びの中に自然な形で保育項目が入り込み,「課程保育案（である保育項目）が誘導保育案の中にずうっと溶け込んでいながら，しかも各保育項目がきちんきちんと徹底的に各期待効果を遂げ得るように指導され，それがまた更にその誘導保育が子どもの生活の方にずっと入り込んで自由遊びと一緒になって」くることが一番望ましい形であるとして「生活」概念を用いる。

野沢らは倉橋理論を，内容・方法の明確な概念化が成立しえない，保育内容が明確化されていないものと批判したが，倉橋は子どもが身につけるべき保育項目が遊びや誘導保育といった幼稚園生活の中で自然な形で取り入れられることがふさわしいとし，課程保育案で遊びや誘導保育で不十分であった保育項目を取り込む配慮をとすることにより，幼児の心身の発達や友達との関わり・道徳性などを身につける教育目標をバランスよく習得するものとした。つまり倉橋の理論は「生活」概念の中に保育項目などの保育内容と教育方法を内包しており，保育案を通じて子どもが身につけるべき保育内容を習得するものとして理論化されたものだといえる。また倉橋は，小学校の教科やフレーベルの恩物主義保育を批判しながらも教育内容を明確化しなかったのは，子どもの興味関心に基づく遊びなどの教材の選択と保育者によって導かれる誘導保育の相互作用により作り出される保育が，幼児の保育内容としてふさわしいと考え，教育

内容の統一化・画一化をあえて排除し，保育者の保育内容・教材をみる目を養い，子どもの実態に応じて誘導する保育者の自由度や独自性を大事にしようとしたのではないかと思われる。

5．おわりに

倉橋が明治45年に京阪神三市連合保育会で行った講演から誘導保育論を具体化した昭和11年の保育案までの講演の内容を踏まえ，倉橋の「生活」概念について検討してきた。倉橋の「生活を生活で生活へ」という発言には，幼稚園における幼児の生活を，生活という教育方法を通して，保育項目を含むまるごとの生活の形へもっていくという保育内容の意味があり，倉橋は幼児にふさわしい教育方法と保育内容の２つの意味を生活という言葉に内包した。ここで倉橋は，小学校以上の学校教育やフレーベルの恩物主義保育で行われている教師・保育者主導の教育を否定し，また活動時間を時間割の羅列のような細切れの教師主導の形式を避け，子どもの発達や自発性，個人差，幼児期の特性に合わせた幼児期特有の教育方法と保育内容を生活という語で説明した。また「生活の教育化」ということを倉橋は意図しながらも，「化してしまっては生活の本味がなくなる」「生活を主体として，その中へ教育を織り込む」とこだわる様子からも分かるように，幼児の自発性や自己充実を生み出すためにあくまで自然な生活を子どもたちと保育者で作り出す幼稚園生活としてイメージしながら保育者の教育的意図を生活に織り込むという，集団保育における生活を基盤とする誘導保育案を展開していった。この「生活」という概念と「保育項目」の関係性についても，生活という大きなくくりの中に，遊びや保育項目が子どもの自主性を尊重する形で入り込み，保育者が誘導する自然な幼稚園生活の中で幼児の心身の発達や幼児の自己充実を促すものとみなしたことが明らかとなった。生活の主題が先にあり，その中に保育項目が入ってくるという倉橋の保育理論は，現在の幼稚園教育要領において，「各領域に示されている『ねらい』は幼稚園の生活の全体を通して幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうものであり，『内容』は幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されなければならない」とする保育内容の考え方の端緒をきりひらいたものとして評価される[37]とする森上の指摘そのものであり，倉橋の誘導保育論による生活と保育項目の理論化の過程から明確になったといえる。

注

1）諏訪義英「倉橋惣三研究の方法（2）－研究の動向から－」大東文化大学紀要人文科学第22号，1984年，291-305頁
2）宍戸健夫「大正期幼児教育理論の構造－倉橋惣三の保育理論の検討－」愛知県立女子大学・愛知県立女子短期大学紀要第13巻，1962年，233-247頁
3）諏訪義英「倉橋惣三の就学前教育論－その基本構造－」暁学園短期大学研究紀要第１号，1967年，44-54頁。「倉橋惣三の就学前教育論－家族制度と家庭教育の再編成」暁学園短期大学研究紀要第４号，1970年，19-36頁
4）津守真「倉橋惣三と誘導保育論」幼児の教育第64巻第10号，1965年，9-23頁
5）坂元彦太郎『倉橋惣三，その人と思想』フレーベル館，1976年
6）岡本和子「倉橋惣三の幼児教育理論に関する一考察」美作女子大学美作短期大学研究紀要第23巻，1978年，28-40頁。
7）岡本和子「倉橋惣三の保育理論に関する一考察」岡山県立短期大学研究紀要第24巻，1980年，58-64頁
8）諏訪きぬ「1930年代の保育案に見る生活概念の検討（その１）－倉橋の系統的保育案」鶴川女子短期大学研究紀要１巻，1978年，22-43頁
9）野沢正子「保育の内容と方法－倉橋惣三の誘導保育論と保育案の検討－」大阪社会事業短期大学社会問題研究第28巻第１・２号，1978年，125-142頁
10）小川博久「倉橋惣三の保育理論研究－保育実践と理論との関係性をどうおさえたか－」日本女子大学紀要家政学部第49号，2002年，43-49頁
11）小山優子「倉橋惣三の誘導保育論の今日的意義－保育理論の発生から系統的保育案の展開まで－」島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要第54巻，2016年，27-36頁
12）倉橋惣三「幼児保育の新目標」婦人と子ども第12巻第10号，1912年，459-478頁
13）倉橋惣三「教えない教育」婦人と子ども第13巻第１号，1313年，32-49頁

14）倉橋惣三「保育入門（一）」婦人と子ども第14巻第１号，1914年，3-9頁
15）倉橋惣三「保育入門（七）」婦人と子ども第14巻第８号，1914年，366-375頁
16）倉橋惣三「保育入門（八）」婦人と子ども第14巻第９号，1914年，411-418頁
17）倉橋惣三「保育入門（十三）」婦人と子ども第15巻第12号，1915年，527-532頁
18）倉橋惣三「保育入門（九）」婦人と子ども第14巻第10号，1914年，463-469頁。「保育入門（十）」婦人と子ども第15巻第１号，1915年，32-34頁。「保育入門（十一）」婦人と子ども第15巻第２号，1915年，76-78頁。「保育入門（十二）」婦人と子ども第15巻第７号，1915年，302-304頁
19）倉橋惣三「幼児教育の特色」婦人と子ども第15巻第９号，1915年，365-373頁
20）倉橋惣三「幼稚園とはいかなるところか」婦人と子ども第18巻第５号，1918年，169-180頁
21）倉橋惣三「生活か教育か」幼児教育第19巻第12号，1919年，454-459頁
22）倉橋惣三「幼稚園雑草」『倉橋惣三選集第二巻』フレーベル館，1965年
23）倉橋惣三「就学前の教育」『倉橋惣三選集第三巻』フレーベル館，1965年，422-423頁
24）同上，436頁
25）同上，435-436頁
26）同上，423-424頁
27）倉橋惣三「幼稚園保育法眞締」『倉橋惣三選集第１巻』フレーベル館，1965年，19頁
28）同上，25頁
29）同上，23-24頁
30）同上，108-110頁
31）同上，30頁
32）同上，77-78頁
33）倉橋惣三「保育項目の実際」幼児の教育第34巻第８・９号，1934年，68-69頁
34）倉橋惣三「系統保育案の実際」『大正・昭和保育文献集第六巻』日本らいぶらり，1978年，4-6頁
35）倉橋惣三「保育案」『幼児の教育』第36巻９号，1936年，65頁
36）倉橋惣三「フレーベル」『倉橋惣三選集第一巻』フレーベル館，1965年，353頁
37）森上史朗『子どもに生きた人・倉橋惣三ーその生涯・思想・保育・教育ー』フレーベル館，1993年，289頁